

# 心をつなぐ

# ふるさとの自然

希少動植物を保護するために設けた保全ゾーン。コンクリートで護岸工事後、その場所に元々あった表土で覆い、工事前と変わらぬ自然環境と景観が保たれています。(志民沢)

## 甚大な被害に 念願の土谷川改修

を記録。町内随所に大きな傷跡を残しました。

特に、土谷川はこれまでに経験のないほど増水。濁流となって、床下浸水や河岸・農地などの決壊、冠水など甚大な被害をもたら

長年にわたり、流域に暮らす人たちの生活を潤し、また幾度となく自然の猛威で惑わせてきた「準用河川土谷川」。平成十四年の大雨被害による災害復旧事業が約四年の歳月を経て完成し、六月二日、竣工式典が行われました。この間、地域に残されていた希少動植物と共存する川づくりが、多くの人たちの手で進められ、川が生まれ変わりました。この事業を通じて「ふるさとを愛し、誇りに思う心」が広がりをみせています。

昔から田畑や家屋にも被害が起きる所だったので、土谷川を何とか改修できないかと、地区で町や議会に陳情したこともあり「ますよ」と当時を思い起こします。

平成十四年は、立て続けに八月にも災害が起きた年。七月災と合わせると町道や橋、河川の被災箇所は、町全域で七十三カ所。被害

## 希少動植物と 共存する川づくり

工事区間は、土谷川「道の駅くずまき高原」付近から小屋瀬の山形川との合流地点までの約七キロ。その区間には、「いわてレッドデータブック」に掲載されている希少動植物が八種類も生育、生息しています。このことから、土谷川の整備計画は「清流を未来に誓う土谷川」をキャッチフレーズに、

### 新しい取り組み

町は、より良い川づくりのため、

- ①治水対策を主に立案する「計画検討委員会」②希少動植物や環境対策を立案する「希少動植物対策検討委員会」③地域住民が主体となった計画の最終決定する「土谷川の川づくりを共に考える会」を設置しました。

これまでの事業との大きな違いは、地元と学識経験者、行政が事業の着工前や途中の段階で、何度も協議しながら理想的な川づくり

しました。

### 台風が心配の種

「台風の時期が、心配の種でなつす。今は、工事のお陰で高枕で寝られて幸せですよ」と元木自治会長の元村義男さん(73・志民沢)は、念願の河川改修を喜びます。

「この辺は沢が多くてすぐに水が出るので、雨降りが二、三日続くといつも心配していました。梅雨時や台風の時には、



平成14年月の豪雨で冠水したパイプハウス (志民沢)



川づくりを共に考える会の会長を務めた元村義男さん

総額は約十五億四千八百万円に上りました。

その大半を占めた土谷川の被害額は、約十一億円。国の災害査定で、復旧事業と一般の改修事業が同時に行える「河川等災害関連事業」として採択され、総事業費約二十一億七百万円の巨費が投じられました。



「清流を未来に誓う土谷川」と刻まれた記念碑の除幕式 (施工業者15社が寄贈。小屋瀬農村センター裏に建立)

を進めてきたこと。地元の小中学生が自然保護活動に積極的に参加したことが挙げられます。

施工業者で組織された「土谷川安全協議会」もまた、動植物の保護や河川ふれあい行事への参加協力など積極的に川づくりに関わってきました。

施工業者の一人、葛巻土建(株)の山口崇さん(28・新町)は「人と環境とが共存する今回の工事の経験を、次の工事に生かしていきたいと思えます。今回の事業を通じて、子どもたちももっと川に親しんでくれればいいですね」と期待を込めていました。